

コタロー漢方エキス製剤の特徴

小太郎漢方製薬(株)学術情報課・課長
三室 洋 (ミムロ ヒロシ)

略歴

1975年 兵庫県神戸市生まれ
1999年 京都大学経済学部卒業
1999年 株式会社エム・アイ・ティー入社。プログラマー、SEなどの業務を担当。
2005年 カネボウ薬品（現クラシエ薬品）株式会社入社。MR（医療用）として6年、
学術（医療用）として2年勤務。
2013年 小太郎漢方製薬株式会社入社。学術情報課に勤務。2014年から課長。
現在に至る。

一般社団法人日本漢方協会 学術講師

著書：『なんとなくわかった気になる漢方の歴史』あかし出版（2019年）



「漢方エキス製剤っていろいろなメーカーがあるけれど、どこの製品も同じなの？」そのような疑問をお持ちになったことはないでしょうか。この疑問に簡単にYes/Noで答えるのはなかなか難しいですが、メーカーが「良い製品」を作るためにこだわりを持ち、様々な努力や工夫を行っているのは確かです。そのような製剤の「特徴」を知っておくことは、医療従事者にとって有用なのではないでしょうか。

漢方エキス製剤ができあがるまでには主に次のような工程があります。①原料生薬を調達②生薬を水で抽出③抽出液を濃縮④濃縮液を乾燥⑤乾燥エキス粉末と添加剤を混合⑥細粒・顆粒・錠剤などの剤形に整える⑦包装する。これらの工程の中で、様々な努力や工夫を行っています。また、生産拠点の立地、品質管理や安全管理（検査）、生薬の配合などにおいてもいろいろなこだわりがあります。

本セミナーでは弊社・小太郎漢方製薬株式会社がどのようなこだわりを持ち、どのような努力・工夫を行っているのか、その一部をご紹介します。

犬猫の腎機能低下症におけるプラセンタの使用

麻生獣医科医院・院長

上田 裕 (ウエダ ユタカ)

略歴

福岡県出身

1987年 北里大学獣医畜産学部獣医学科卒業

1994年 麻生獣医科医院を開院

2011年 米国テネシー大学公認 動物理学療法士 (CCRP) 取得

CCRP : Certified Canine Rehabilitation Practitioner

2017年 国際中医師「International TCM Doctor」(B級)取得

所属

獣医師、動物理学療法士 (CCRP)、国際中医師 (B級)、麻生獣医科医院院長

日本ペット中医学研究会会長、日本伝統獣医学会会員、日本獣医皮膚科学会会員

カコ動物看護学院講師、国際中獣医学院講師



死因の上位にあるにも関わらず犬猫の慢性腎臓機能不全症は症状の発現の遅さから診断時にはかなり進行している患畜に遭遇することが多く、また治療に対しても患畜の協力も得づらい場合が多く症状の進行を止めることが困難で、治療開始後短い期間で亡くなってしまう場合が多い疾患です。近年当院では西洋医学的治療と中医学的治療を併用することで本症に対してある程度の延命が出来たと考えられる症例をいくつか経験しました。

この治療の中でQOLの維持はとても重要な要因です。特に食欲に関しては最も重要な項目だと思われます。しかし食欲廃絶の患畜の「なぜ食べないのか」の答えを見つけることはとても困難な課題であり、本当の正解を導くのは不可能だと思われます。

その中で薬理的な作用と栄養学的な作用を併せ持ち、投与の簡便性もあり、嗜好性もあるプラセンタ製剤を併用することで食欲が改善しQOLの維持管理の一助になっていると思われる症例を今回報告させていただきます。